

序

八五周年を過ぎたころであった。原田季夫先生に、一〇〇周年のおりにはぜひ記念説教をしていただきたい、と申しあげると、先生は「いやいや、そんな大役を」と謙遜されながら、顔をほころばせておられたことをおもいだす。その先生は忽然として九〇周年の年に世を去られた。そのころ社内に歴史編纂の意気が盛りあがっていた。一〇〇という数は、ひとつの区切りで、やがてその時を迎えるということが気になりはじめていたと言えよう。

創立以来の重要資料は震災と戦火をくぐって、山と積まれて保存されているがまとめたものとなると断片的な印刷物しかない。膨大な資料を整理することは大変なことだが、二世紀に足を踏み入れることが許されるなら、好善社がこれまで支えられ、貫かれてきたものがなんであったかを吟味し、世人の批判を仰ぐ必要がある。それを踏み台としないことには未来へと歩み出すことはできないと考えたのであった。

いよいよ編纂計画は発足した。編纂委員には長尾文雄、棟居洋の両氏が選ばれ、委任されたいであるが、お二人とも職業を持ち、尼崎と逗子に住んでおられるのだから、一〇年の労は並々ならぬものであった。大詰めに近づいたある日、長尾氏は上京のおり日本基督教団出版局企画委員の船本弘毅先生とたまたま新幹線で同じ車中の人となった。話がこの計画に及ぶと深い関心を示され、以来、積極的なお計らいでこの度の刊行となった。当初この計画は自費出版として考えられ準備はしていたものの、この時に至って実はその蓄えも乏しく、もし、

出版局のご配慮がなければ公刊されることは更に遅延したことであろう。

この書物は、名もないキリスト者の群れの一〇〇年の歩みであるが、それなりにいくつかの起伏消長があった。ヤングマン女史が渡来したこと、創立期の婦人だけの歩み、私立らしい病院を開こうとしたおりに、はるか英国より資金が送られたこと、日米間の風雲急を告げたおりの慰糜園の苦悩、戦後の新展開、そして不肖私が原田先生に出会わされたこと、すべては神の備えであり、それを信じて生かされた道であった。ここに、心から栄光を父なる神に帰するものである。

さて、第二世紀の展望はといっても、なにもない。歴史は主にゆだね、神と人にとんじてゆきたいというのが、社員一同のおもいだ。結びに、この一〇年の間、長尾、棟居の両氏を補佐して資料作りに参加してくださった、藤井征子姉、楠木美和子姉をはじめ、そのほかのかたがた、また、原稿のとりまとめにご協力くださった柏木まき子姉に対し厚くお礼を申しあげる。

一九七七年クリスマス

好善社理事長 藤原偉作

凡例

- 一 文献の引用文については、原則として、旧漢字を新漢字に改めた。
- 一 本書中「ある群像」という名称が出てくるが、これは好善社が年二回発行している広報紙（現在三三号まで発行）のことで、本書のタイトルと直接関係はない。